

第1回 岡崎地域活性化ビジョン検討委員会
摘 録

日 時：平成22年7月13日（火）午後6時から午後8時30分

会 場：京都市勧業館みやこめっせ 地下1階 第2・3会議室

出席委員（敬称略）

委員長

もんない てるゆき 京都大学大学院工学研究科教授
門内 輝行

副委員長

たかぎ ひさかず 岡崎地域活性化懇談会座長
高木 壽一

委員

（五十音順）

うえむら のりこ 市民公募委員
上村 憲子
おおしま さちこ 一級建築士・技術士(建設部門), スーク創生事務所代表
大島 祥子
おおた せつこ 神宮道商店街組合会長
太田 節子
こばやし かおり ショウクリエイター, 「第26回国民文化祭・京都2011」開閉会式 脚本・演出担当
小林 香
さわべ よしのぶ 岡崎自治連合会会長
澤邊 吉信
なかじま せつこ 京都大学大学院人間・環境学研究科准教授
中嶋 節子
なかにし かずや 市民公募委員
中西 一彌
にしむら たかし 京都市総合企画局長
西村 隆
はしづめ しんや 大阪府立大学21世紀科学研究機構教授, 大阪府立大学観光産業戦略研究所長
橋爪 紳也
はまさき か な こ 伝統文化プロデュース連REN代表
濱崎 加奈子
ふじい ようこ 京都市未来まちづくり100人委員会(岡崎ホールディングス), ライター
藤井 容子
ほんだ かずお 平安神宮禰宜
本多 和夫
みなみ たかあき 京都商工会議所観光産業特別委員会委員長, 京都駅ビル開発(株)相談役
南 隆明
むらい やすひこ 京都市美術館長
村井 康彦
もりもと ゆきひろ 京都大学大学院地球環境学堂教授
森本 幸裕

以上17名

1 開会

事務局（総合企画局市民協働政策推進室プロジェクト推進第二課長 三科）

ただ今より第1回岡崎地域活性化ビジョン検討委員会を開催させていただく。委員の皆様におかれては御多忙の中、御出席いただき御礼申し上げます。本日の委員会は公開となっております。報道席及び一般傍聴席を設けているので御了承願いたい。

それでは、開会にあたり、京都市長門川大作から御挨拶申し上げます。

2 門川市長あいさつ

門川市長

忙しい中、本検討委員会委員に御就任いただき御礼申し上げます。

岡崎という地域は、改めて素晴らしい場所と感動している。京都市美術館は昭和天皇の即位記念に寄贈された日本で2番目に古い大規模公立美術館であり、現在はボストン美術館展を開催して多くの人が来訪している。京都市動物園は大正天皇の御成婚を記念して造られた、日本で2番目に古い歴史を持つ動物園である。建設に際し、市民の方々から多額の寄付が寄せられた。京都市武道センターは、世界中の武道をする人たちのふるさととして親しまれている。その他にも開館50周年を迎えた京都会館、完成から120年が経つ琵琶湖疏水、国際交流会館、東山を背景にした美しい景観など、素晴らしい魅力に満ちている。

明治時代、遷都により京都が都の地位を失った後、遷都1100年を記念して建立された平安神宮は、京都復興に掛ける当時の市民の心意気を感じる施設である。

しかし一方で、それぞれの施設がばらばらに運営されており、地域での一体感が醸し出せていないという指摘も受けている。

岡崎地域を活性化することで、今後は、世界に冠たる文化交流ゾーンとして、あるいは京都の観光戦略、MICE戦略の拠点として、岡崎を拠点に、京都から、関西を日本を元気にしていきたい。

3Dというのが最近流行っている。3Dは視点が複数あるから立体的に見え、面白い。今の我が国は、東京に一極集中している。先進国で人口や経済、情報がここまで集中しているのは日本だけである。一極集中を打破していくためにも、関西の核として、京都、岡崎が拠点になっていく必要があると感じている。そんな想いで検討委員会を立ち上げさせていただいた。どうぞよろしく願います。

3 委員紹介

事務局

続いて、委員紹介をさせていただく。委員名簿は、配布資料1のとおりである。

なお、本検討委員会設置要綱第4条第2項において、委員長及び副委員長は委員の内から市長が指名すると規定しており、委員長には門内輝行委員に、副委員長には高木壽一委員をお願いさせていただく。

それでは、ここで各委員から自己紹介をお願いしたい。なお、柏原委員及び山口委員につきましては、本日、御都合がつかず御欠席されている。

それでは、門内委員長、高木副委員長、続きまして上村委員から順に自己紹介をお願いしたい。

——（各委員自己紹介）——

事務局

ありがとうございます。それでは、ここで門内委員長より御挨拶いただきたい。

4 委員長あいさつ

門内委員長

門川市長からの指名で委員長を務めさせていただく。京都市では景観行政を中心に様々な仕事をさせていただいている。

最近関心を持っているのは、国政レベルでも検討されている「成長戦略」である。岡崎地域には個々の建物、文化財はたくさんあるが、それらの連携が図られておらず、充分魅力を発揮しきれていない。サッカーなどのチームスポーツも同じだが、個々の能力がいくら優れていても、チームとしてうまく機能しないと本来の力が発揮できない。様々な資源が集積している地域全体を考えていくことが重要であり、岡崎地域を京都の「成長戦略エリア」として発展させていく必要がある。

そうした中、今、近代という時代を、新しい視点で歴史的に見られる時が来たのだと思う。岡崎地域には近代を中心に、京都の豊かな文化資源、環境資源が蓄積されている。そうした資源をいかに活用していくのかという視点が重要となるだろう。その方策について皆様から御意見をいただきたい。

本検討委員会には、実に多彩な分野の方々に集まっていた。委員の皆様様の様々な御意見、知恵をうまく集合知として集めて、未来に向けて創造的なビジョンを創っていきたいと考えている。

事務局

ありがとうございました。それでは、ここからは門内委員長に進行をお願いしたい。

5 議題

門内委員長

それでは、ここから私が進行を務めさせていただく。本日の議題としては、3つある。最初に事務局から「岡崎地域のポテンシャルと課題等」について説明いただく。2番目に、既に委員の皆様方には事務局からお願いをしてあるが、「10年後の将来像と実現のための方策」について、各委員4分程度で御提案いただきたい。そして、最後に「今後の委員会の進め方」について、協議させていただきたい。

最初に「岡崎地域のポテンシャルと課題等」について、事務局から説明をお願いする。

(1) 岡崎地域のポテンシャルと課題等

—— (説明 事務局 総合企画局市民協働政策推進室岡崎地域活性化担当部長 奥) ——

門川市長（退席）

申し訳ないが次の公務のため、ここで退席させていただく。岡崎地域の活性化を推進するにあたり、行政が縦割りになってはいけないということで、本検討委員会と並行して庁内プロジェクトチームを設置した。

また、国政レベルにおいて検討されている、成長戦略やMICE戦略に対してもいろいろな提言を行い、国の政策も誘導していくような、そんな取組も力強く進めていきたい。守るべきものはしっかりと守り、同時に改革すべきは大胆に改革して、委員の皆様のお知恵をお借りして、岡崎地域の活性化を推進していきたいと考えている。よろしく願います。

門内委員長

資料3「岡崎地域のポテンシャルと課題等」を説明いただいた。また、資料4として、岡崎地域の歴史についてまとめた資料もある。こちらについては、時間の都合上、参考資料ということになるが、是非お目通しいただき、じっくりと考える素材として御活用いただきたい。

（2）委員からの意見・提案＜10年後の将来像と実現のための方策＞

門内委員長

では続いて、岡崎地域の10年後の将来像と実現のための方策について、各委員4分程度で御発言いただきたい。

上村委員

私が本検討委員会の市民公募委員に応募した動機は、京博連（京都市内博物館施設連絡協議会）のボランティアとして、京都市美術館でボランティア活動をしており、芸術や岡崎地域に関心を持っていたからである。

京都市美術館は、ちょうど今、ボストン美術館展が開催され、多くの来館者で賑わっている。しかし、普段は時間に余裕のある美術ファンの方しかいない。また、近くには細見美術館をはじめ多くの民間美術館が立地しているが、どの美術館で何の美術展、展示会をしているか、この地域にいてもなかなか情報が得られない状況である。

現在の状態では、文化芸術を求め、岡崎地域を訪れた方に良い体験をして帰っていただけたか、再びリピーターとして岡崎地域を訪れていただけるか疑問である。

このエリアでも、日曜日などにはスケッチをする画家や市民の姿を見かける。10年後には、パリのモンマルトルの丘のように、「岡崎地域に行ったら、あんなに楽しく1日楽しめる」というような芸術の都になって欲しい。

門内委員長

「10年後」という時間設定について、補足しておく。20年後では遠過ぎるし、2

～3年後では身近過ぎるだろうから、現実を見すえつつ、将来ビジョンの実現を図る期間ということで「10年後」ということでお願いをしている。

また、お手元には「疏水物語」と書いた飲料水をお配りしている。のどを潤しながらお話いただきたい。

大島委員

10年という期間は、長いようで短い、難しい期間である。具体的な将来像の提案というより、現在の岡崎地域に何が欠けているのか、強化していくならどのような方向かということをお話したい。

私は京都で育ち、お正月に平安神宮へ初詣に行ったり、美術館に行ったりという形が高校生、大学生くらいまでの岡崎地域との関わりであった。しかし現在では、岡崎地域に対しては、特別な感情を抱いている。その理由は、京都市景観・まちづくりセンターに所属していた時、京都のまちづくり史を作る中で、岡崎地域が京都の近代化において重要な役割を果たしてきたことを知ったからである。遷都1100年記念事業や多くの博覧会開催など、現在の京都のまちづくりにとっても必要な戦略的な都市プロモーションが計画的になされていた地域である。岡崎地域の活性化を検討することは、これからの京都のまちづくりにおいても象徴的な取組になる。まずは、まちの歴史をしっかりと発信することが必要だろう。

今回の検討委員会において、私に求められる役割は、志を持った人たちのマネジメントに関することだろうと考えている。

私は楽洛まちぶら会というNPOの活動として、「三条あかり景色」という、夜に着目した三条通のブランディングに関わってきた。

この活動では非常に多くのことを学ぶことができた。志をつなぎ、地域密着型の活動を育てていくことで、最終的には15万人もの方に集まっていただけの取組となった。この明かり景色と並行して様々な社会実験をやったが、一つの例として、京都和装産業振興財団と協力して、着物を着ておしゃれをして歩ける三条通りをつくっていこうという取組が挙げられる。大阪の女性の方に聞くと、「大阪では着物を着て歩ける場所がなかなかない」という状況だが、一方で京都は普段でも着物を着るおしゃれが違和感なく楽しめるまちである。岡崎地域においても、おしゃれをして訪れたいようなまちになるとまちの特徴が出せる。

岡崎地域、特に公園区域に指定されたエリアが三条通りのような街中と比較して何が違うのかというと、住宅や暮らしがないこと、賑わいを生み出すコンテンツ力がないことが挙げられる。ただ、すべての地域が街中と同じような地域として均質化される必要はないので、岡崎地域は岡崎地域の強みを活かしていけば良い。

岡崎地域の強みは公共施設や広い道路、公園などハードが充実していることがある。何が欠けているかということ、ネットワークである。施設間、交通のネットワークなどはもっと充実すべきだろう。また、岡崎地域の持つ物語の活用も必要だ。先ほど説明の中

のアンケートでも、岡崎地域のイメージとして「近代」と答えられた方が非常に少なかった。岡崎地域が持つ物語が、なかなか知られていないということが表れている。物語を積極的に発信していくことが必要である。

また、この地域に来れば、何かがあるのではないかという期待感を演出すること。ネットワーク、物語、期待感というものがセットになると、この地域をソフトの面で大いに盛り上げていくことができるのではないのかなと感じた。

太田委員

神宮道商店街で商売をしており、日頃、観光客の方の道案内をすることが多い。京都は碁盤の目で分かりやすいと言われているが、実は、案内表示が少なく、観光客の方には分かりにくいまちである。これからの岡崎地域は、案内標識が充実し、初心者の方にもわかりやすいまちになると良い。また、たくさんの方が来られる観光のピーク時期などに、各美術館をつなぐ循環バスを走らせるなど、わかりやすい交通手段があると良いのではないかな。

小林委員

先ほどの資料説明で、岡崎地域はすごくポテンシャルの高い地域だが、多くは過去の話だと感じた。私は舞台演出の仕事をしているが、ニューヨークのリンカーンセンターやロンドンの劇場街など、文化の殿堂と言われる世界の地域では、「プロの業（技）」があり、それを見るために多くの方が集まってくる。私自身、京都で生まれ育ったが、京都会館には、あまり公演を見に行った経験がない。もしもプロのコンテンツ、あるいはプロでなくとも良いものを見ることができる地域であれば、人はおのずと集まり、また良い舞台を見る体験を通じ、次の文化芸術を担う世代が育つことにもつながるのではないかな。

先日、京都会館の図面を拝見したが、現状機能・設備ではプロを呼ぶのは難しいだろう。多目的ホールになっているため、実際のプロには使いにくいホールである。2000席というキャパシティや50年の歴史は素晴らしいが、実際に使うには、演劇では大きすぎるし、コンサートとしては音響面に難があるのではないだろうか。今後、再整備する際には、コンテンツをどのようなものにするのかを考え、そのために必要な再整備を行っていただきたい。

東京では、歌舞伎座が改修のため休館したところ、周辺地域全体が閑散として全く別の地域ようになってしまった。劇場が賑やかになると、人が集まり、周辺地域全体が活性化する。

朝、何を着て劇場に行こうかなというところから始まり、公演を見る前にカフェでお茶をしよう、公演が終わってからは何をしようかなど、一日をクリエイトするのが、劇場の使命でもあると思う。そういうトータルな視点で、劇場と地域の活性化を考えていきたい。

澤邊委員

地元の者として、岡崎地域にもそこで暮らしている住民がいるということは忘れないでいただきたい。

日頃は、京都学生祭典、平安神宮の行事などには、できるかぎり地域も参加・協力もさせていただいている。岡崎に住んでいてよかったと思えるものを創っていただきたい。

先ほどの説明を聞き、自分達が住んでいる地域にはすごい資源があるのだなど改めて認識した。これらをいかに活用していくかが問題である。現状としては、昼間は多くの人が集まるが、夜が非常に寂しい地域である。夜は静かな方が良いという考えもあるが、既存の施設や資源が活かされていないのはもったいない。例えば、平安神宮は正月三日に多くの参拝客の方が来るが、その時、周りの施設の多くは休館している。最近では、正月三日に京都市動物園が開園するようになったが、多くの方が来園している。多くの方が訪れるピーク時期には、各施設が連携し開館するなど、サービス精神がもう少しあっても良いのではないか。

中嶋委員

私は建築・都市の歴史を専門にしている。先ほど説明があったように、近代建築物、文化施設がこれだけ集積しているのは、日本の中では恐らく上野公園か岡崎地域だけではないかと思う。

私は、よく学生を連れて岡崎地域周辺を歩く。岡崎地域には、様々な見所がある。一つは近代建築物のコースで、平安神宮から近代建築、現代建築まで一通り見ることができる。二つ目が、社寺仏閣コースで、清水寺から始まり、東山の著名な社寺仏閣を見て、平安神宮をゴールとするコース。もう一つが、近代遺産コースで、蹴上浄水場から始まり、疏水インクライン、南禅寺の中の水路閣、そして琵琶湖疏水記念館を回るコースである。それぞれ非常に良いコースだが、コースとして紹介するガイドブックはほとんどなく、各スポットや施設の紹介のみである。各資源をつなぐ仕組みというのは、まだまだ欠けていると思う。

以前、ニューヨークに住んだことがあるが、ミュージアムマイルと呼ばれる公立美術館、私立美術館が集積した地域がある。この地域では、秋の1週間に、ミュージアムウィーク、ミュージアムナイトと称して、メインストリートの五番街を全て歩行者天国にし、同時に美術館を無料公開するというイベントを開催している。この時期には、多くの市民、来訪者が美術館を巡り、地域を歩くことを楽しんでいる。ニューヨークのような世界的な大都市であっても、大都市であり続ける努力、地域全体のマネジメントや施設間の連携をしっかりと行っている。現在の岡崎地域には、こうしたマネジメントが欠けており、各施設の集積ポテンシャルを活用する上で重要である。

景観の歴史からいうと、岡崎地域は東山を背景にしており、京都を象徴する一つの場所として、遷都1100年記念祭などの開催地となってきた。また、鳥瞰的に空から京都を見ると、御所、糺の森、吉田山、船岡山、岡崎地域の緑が平地の中に森が浮かぶよ

うに存在している。岡崎地域を近代の「文化の森（杜）」というような位置付けで捉え、環境モデル都市や文化的景観など各制度間との調整も行いながら、全体統括するような大きなビジョンをこの場で決めていくべきではないかと考えている。

中西委員

公募委員として3点意見を述べる。①「岡崎」の知名度が低いことである。京都府外ではほとんど知られていない。京都駅に新しく出来た「京都総合観光案内所」にも、個別施設のパンフレットはあるが、エリアとしての岡崎地域の資料はない。地下鉄東山駅の中にも、大きな地図はあるが、「岡崎」という地名は出てこない。

例えば上野動物園に上野という地名が入っているように、岡崎地域の各施設名称に「岡崎」の地名が入っていれば、個別施設からの情報発信で周知されるが、岡崎公園と岡崎グラウンドなど、岡崎という名称が入っているところは極めて少ない。地域知名度向上に向けた取組として、八角九重の塔の再現など、新しい岡崎のシンボルを創るような抜本的な取組が必要ではないか。

②岡崎地域は、明治期以降に整備された場所であり、古くからの歴史を持つ京都の中では珍しいエリアである。明治期の象徴として一般的に赤レンガとガス灯がイメージされるが、夜の観光客を増やすために、神宮道及びその周辺に順次ガス灯を設置し、主要な建物をライトアップしてはいかがだろうか。

③京都市の政策として「歩いて楽しいまち」が推進されているが、岡崎地域は歩いて回るにはちょうど良いエリアだと感じる。岡崎地域に観光センターを設置し、地域マップを配って、歩いて回れる岡崎づくりに重点を置きたい。

西村委員

委員会には、京都市からは、私と村井美術館長が参画させていただいている。私の役割は、行政としての総合的な立場を果たすことだが、加えて、せっかくこうした機会をいただいたので、私自身の意見・思いもいろいろと発言していきたい。

10年後の岡崎地域の将来像ということで、本日は、二点意見を述べたい。

一つは、京都はやはり季節感が魅力であり、岡崎地域は京都の四季が映えるまちであり続けたいと思う。岡崎地域の季節感というと、春の桜、夏の新緑、秋の紅葉などの自然の季節感、加えて、初詣や時代祭、成人式など年中行事としての季節感というものがある。

二つ目は、一年中、世界中からの来訪者で賑わう岡崎にしたい。他の委員の方からも御意見があったが、やはり賑わいが足りない。いつ行っても岡崎へ行ったら楽しい、「毎日何かがある岡崎」というようなまちにしたい。

現在の岡崎地域の夜は確かに寂しい状態だと思うが、祇園や河原町のような賑わいが岡崎地域に似合うかと言うとそうではないと思う。この検討委員会の中で、岡崎地域にふさわしい夜はどのような夜なのかということも考えたい。

橋爪委員

皆様の御意見をお聞きしながら、10年後、20年後の岡崎地域の姿を思い浮かべていた。素晴らしいまちのイメージが浮かんだ。岡崎地域の課題については、京都市の資料にも挙げられており、既に論点は整理されている。後は具体的にどのように実現していくのか、ということが重要である。

先ほど、重要文化的景観の説明があった。私も文化的景観の候補を選ぶための文化庁の研究会メンバーをしていたが、文化的景観は、従来の文化財と異なり、それぞれの時代の景観や活動が途切れることなく現在へつながっていることにより評価されるものである。本検討委員会で今後10年間において成すべきことを考えるということは、これまでの岡崎の歴史の上に、新たな風景を描き、京都の未来、次の世代へとつなげる仕事なのだという点を、今日この場で、私も含めて覚悟表明したと認識している。

岡崎地域の将来を考える視点として4点挙げたい。

1点目は、水路を活用することを柱とすべきである。昨年度、水都大阪のプロデュースに携わったが、本来は京都こそ、水の都である。琵琶湖疏水を活用するために、様々な規制があるのであれば、それを突破する方法論を考えることも重要である。

2点目は、新しい公園の概念を打ち出すべきである。例えばドイツでは、産業遺産を活かした公園の概念がある。英語ではランドスケープパークという表現になるが、ガスタルクを活用してアートセンターとして再生したり、工場の遺構を残しながら、中をプールにしたりする事例がある。ドイツでは、エムシャーパークが有名だが、産業遺産を活かした文化・芸術の公園として整備されている。我々は、公園というとすぐ、木を植えて、ベンチを置いてとイメージするが、岡崎地域に集積した近代資産、地域資源を活かす新しい公園の概念が必要である。

3点目は、事務局資料としても記載されたテーマであるが、MICE戦略の拠点地域として打ち出すべきである。これは現在の国の政策とも響きあう。宝ヶ池の国立京都国際会館とも連携し、岡崎地域も日本を代表するコンベンション集積群として推進していく必要がある。

最後に4点目、これが一番大事だが、財政難の今、描いたビジョンを実現することが非常に厳しい。民間の活力をどのように導入しながら、魅力あるエリアとして岡崎地域の活性化を実現していくのか、という点に最大限、知恵と力を注ぐべきである。

そのためには、資料で課題の一つとして挙げられている「エリアマネジメントの仕組みが不足」という程度では十分ではなく、エリアプロデュースという概念が必要だと思う。エリアマネジメントというのは、全体のビジョン、方向が定まってからの運営のことだと思う。その前にエリア全体をどのように再生、活性化させていくのかという大方針が必要だ。市民、企業や行政とともに強力なリーダーシップの元にプロデューサーチームのようなものがあり、それがマネジメントにもつながっているというような考え方を是非導入していただきたい。

濱崎委員

橋爪委員の御意見、非常に共感した。恐らく共存できる考えだと思うが、私の意見として二つ申し上げたい。

一つ目は中西委員と同じ意見だが、八角九重の塔を再建したい。平安の都と言われるが、現在では平安京を感じられるところが非常に少ない。岡崎地域は近代化のシンボルという説明もあったが、やはり一番栄えたのは院政期である。東京ではスカイツリーの建設が進み経済効果を生んでいるが、岡崎地域にもシンボルが必要である。そもそも、歴史上大きなインパクトを与えた巨大タワーがあったのだから、それを再興すればかなりの話題を呼ぶだろう。

二つ目は、人々が京都に何を求めているのかという視点である。これは、やはり伝統・文化である。国内、海外から京都の伝統・文化を学びたいという方が多く来られるが、実際に体験できる場所は、なかなか知られていない。小林委員から、プロフェッショナルのコンテンツが必要という御意見があったが、京都にしかないプロフェッショナルのコンテンツが何かと考えたとき、やはり伝統・文化ではないかと思う。京都全体の構想として、伝統・文化をもう一度見直すべきではないか。

そのため、武徳殿の活用をクローズアップすることを提案したい。海外では、茶道をはじめ日本文化がブームだが、市長も挨拶でおっしゃったように、日本文化への関心の入り口が武道であったという例は非常に多い。近くにある観世会館などとも連携し、岡崎地域に来れば、プロの伝統・文化が見られる、そのようなまちとなると良い。

そうした視点で地域全体を見直した時、大変失礼かもしれないが、岡崎グラウンドのあり方は考え直した方が良いのではないか。多人数とするスポーツというのは本来京都にはあまりなくて、相撲や、柔道、弓道、馬術、槍術など、少人数で行う武道が主であった。また、こうした武道の方が、興行・集客的にも有効ではないかと感じる。

伝統・文化を体験する場として、来訪者への分かりやすい情報発信も含め、岡崎地域が京都、日本の顔になっていくべきではないか、という点を提案したい。

藤井委員

私は「京都市未来まちづくり100人委員会」の中で岡崎に関心を持っている市民9人から構成される「岡崎ホールディングス」のメンバーの一人である。100人委員会は、基本的に、市民自らができることを自分たちの手で行おうという組織である。現在、岡崎ホールディングスにおいて取組を進めていることがあり、それが岡崎地域の10年後の将来像と非常に関係があるので、本日お話しさせていただく。

私たちのチームが、最初に議論を始めた時、まず感じたのが、先ほど中西委員の御意見にもあったが、岡崎の知名度の低さである。例えばウェブサイトで岡崎という単語を検索しても、まず出てくるのは愛知の岡崎であり、京都の岡崎はだいたい後ろのページにならないと出てこない。

また、同時に私たちのように興味を持っている者が抱いている「岡崎らしさ」というものが、外部の方には伝わっていない。こうした現状を何とかしたい。

私たちは、10年後は、岡崎地域が、らしさ（エリアとしての個性）を持って多くの人に広く周知されている名前、存在になっている、そんな将来像を描いている。先ほどから話題になっている京都の近代化を牽引した岡崎地域の素晴らしい歴史だが、実はあまり知られていない。現在、取組を進めているのは、まず、岡崎を知っていただくという企画、「オカシルリレー講座」である。京都市にも協力いただき、この10月からリレー講座を始められたらと思っている。

リレー講座を企画する際、ハートとアートという二つのキーワードを考えた。ハートは、近代京都の心意気である。大島委員の御意見にもあったが、京都は現在、歴史観光都市として知られているが、自然にそうした状況になったわけではなく、近代京都の先人たちが、血のにじむような努力で、戦略的に成し遂げてきた。また、中嶋委員の御意見にもあったように、ニューヨークが大都市としての努力を続けているように、先人たちの心意気を学ぶことは、京都の現在、未来のまちづくりのためにも重要である。

そして、アートというキーワードである。岡崎地域にはたくさんの文化遺産、地域資源がある。個々の施設ではなく、岡崎地域全体の場所、空間そのものを一つのアートの場としてとらえた時、この場に今あるものの意義とか、失われようとしているものの意義、あるいは別の活用方策など新たな発想も生まれるのではないだろうか。例えば、京都市動物園のゾウ舎（大正12年築）である。確か、現存する日本最古のゾウ舎ではないかと記憶しているが、可能ならばどこかへ移築して、例えばアートのスペースやフリーマーケットの会場として活用するなどの方法で残していけないだろうか。近代遺産をハートとアートというキーワードで、岡崎らしい空間として継承することができる。岡崎らしさを広げ、周知していくためには、こうした文脈づくり、物語づくりが必要だと感じている。

先日、100人委員会で開催したミニフォーラムの中で「岡崎クイズ」という企画を実施した。「平安神宮は、いつ完成したか」という簡単なクイズには多くの方が正解されるが、例えば、「疏水の水力発電は、世界で何番目か」「疏水の傾斜度は何度か」という質問になると、大半の方は分からなくなる。疏水の傾斜度は、技術の高さを説明するための質問だが、約2,000分の1＝2メートルで1ミリ上がるというすごい技術で建設されている。こう説明すると、疏水は、それほどすごい施設だったのかという感動の声が上がった。やはり知ることで、興味が深まっていく。

現在、私たちが進めていることは、小さな活動ではあるが、様々な施設と連携して、岡崎地域を知る活動をより広く進めていければ、10年後の岡崎地域も、もっと違う形で認知されているのではないかと思う。

本多委員

平安神宮に30年近く務めている。長く中にいると、なかなか外が見えにくいのが実情

であるが、平安神宮が岡崎地域の中で、どのようになればいいのかということについていろいろ考えてみた。一番大事なことは何かというと、10年後、100年後も含め、変わらず現在の姿で在り続けるということではないかと考える。

先人たちが創建した社殿、そして庭園を将来に渡り継承し続けることが私たちにとって一番大事なことはないか、それが岡崎の魅力の一つになるのではないかと考える。

南委員

商工会議所で観光産業特別委員会を担当している立場で申し上げたい。京都を訪れる観光客は20年間掛けて3,800万人から5,000万人に増えたが、観光事業者としては、豊かになった実感がない。

課題は三つある。一つは宿泊をもっと増やさなければいけない。それから橋爪委員の御意見にもあったが、MICE誘致を進めなければならない。それから、三つ目は、これから増える中国人観光客、アジア観光客の受入への対応である。京都市の新しい観光振興計画の中には、こうした提案を取り入れていただいたが、観光を通じて、京都がもっと豊かになる施策がないのかということについていくつか申し上げたい。

一つは、グローバルな視点で、海外へ日本をどうやって売り込むのかということである。もちろん秋葉原も、その一つだろうし、当然、京都もその一つである。また、京都の中で海外への売り込み、海外からの観光客の受入の可能性のあるのは、この岡崎地域だと考えている。

二つ目は10年、20年のスパンで考えて、京都に残されている貴重な資産をどう活用するのか、そして、京都の経済活動をどのように活性化することに役立てられるのかという視点である。そういう機能を岡崎地域の活性化の議論に付加すべきだと思っている。

では経済発展において、どのような産業を岡崎地域で展開するのかといえば、製造業ではなく、やはり観光産業であり、京都の都市インフラとして、MICE機能をこの地域で根付かせていかなければならない。国内、海外から呼び入れる受け皿が必要である。

先日、商工会議所で調査団を編成し、シンガポールと香港にMICEの視察行ってきた。観光という概念は、物見遊山ということは別にして、交流人口を増やすことが一番重要な要素だろうが、シンガポール、香港視察では、私たちが京都で展開している観光という概念とは全く違う形で観光を産業として展開している。

京都で今後、どの程度のMICE戦略を展開できるかということは、大変大きな課題ではあるが、10年というスパンの中では、実現可能だと思うので、この検討委員会の議論の中で、是非実現性を検討していただきたい。もちろんハード面だけでなく、各施設の有機的なマネジメントという、ソフト面の仕組みも不可欠だと考えている。その点は平行して議論を深めていきたい。

村井委員

高木副委員長を座長とする岡崎地域活性化懇談会でも、この数年間、岡崎地域の活性化についていろいろと議論をしてきたが、なかなか良いアイデアは浮かんでいない。

文化・交流ゾーンといわれ確かに多くの方が訪れているが、それぞれ個別施設単位の中で完結する活動が大半である。各施設とも中に入れば素晴らしい機能があるが、施設の外を歩いていると、何の施設か分かりにくい。現状において、岡崎地域を交流ゾーンと認識するのは、実は、誤りなのではないだろうかとも感じている。

また、お正月にたくさんの方が平安神宮を参拝されるが、初詣が終わると、すぐどこかへ消えてしまう。つまり、岡崎地域には訪れた方を滞留させる機能がほとんどない。先ほども、お正月に美術館などを開館すれば多くの初詣客が訪れるのではないかという御意見があった。実際に京都市美術館の開館を1日、2日早めたりしたこともあるが、平安神宮の参拝客が、美術館が開いているから帰りに立ち寄ってみようという行動様式はほとんど見られない。交流とか連携を考える際は、別の視点で考えなくてはならないと感じている。

この何年間かの議論を踏まえた個人的見解として、京都会館の再整備の際に、これまでにない交流機能を持った施設として再整備することが、地域全体としての交流、活性化のための唯一の起爆剤になるのではないかと考えている。現在の京都会館の中庭は、待ち合わせか通路として使われているだけだが、是非岡崎地域全体の交流の場となる機能を考えていただきたい。

また、先ほど、年間を通じて賑わうまちという御意見もあったが、岡崎地域を使った新たな年中行事をみんなで創り出していくことも必要だろう。

さらに、岡崎地域内には様々な散策コースがあるとの御意見もあったが、岡崎地域は内部だけでなく、外部に対する文化ハブ機能を果たすことができる地域ではないかと考えている。現時点ではそのような役割を果たしている施設はない。

美術館には多くの小学生や学生が来るが、お弁当を食べる場所もない。来館者の多い休日には、テラスにオープンカフェなどを設けられたら良いが、様々な規制のため困難である。やたらと規制を緩和するのも良くないが、岡崎地域を訪れた方がちょっとベンチに座ってお弁当を食べる、休憩できるというような空間・機能はもっと必要なのだと思う。

八角九重の塔の再建は、遷都1200年記念祭の時にもインパクトのある事業として議論になった。確かに大きな建造物だが、個人的には景観を破壊するというより、東山の緑に朱色が映えて、大変おもしろい施設になるのではないかと思った。

現実的には、現在の京都市動物園をどうするのかなど、いろいろ課題もあり実現は難しいが、活性化のためのシンボルプロジェクトがあっても良いのかもしれない。

森本委員

専門であるランドスケープエコロジーの立場から少しお話ししたい。

京都市は先端的な景観行政に取り組んでおり、景観保全にはかなり成功している。東山の緑についても景観として緑のパターンは守られているが、実は緑の保全はプロセス、マネジメントが非常に大変である。そうした中、「東山伝統文化の森」という京都市のプロジェクトも始まっている。

今回、借景としての東山に対する提案が何もなかったのは、ちょっと残念である。

岡崎地域を活性化するというのは、大変大事な課題であるが、では何故ここに、植治の庭をはじめ多数の庭園群が集積したのか、という点を考えていただきたい。それは、借景として東山が存在したからである。岡崎地域の活性化を議論する際、そうした環境の発想を是非持つべきだろう。

京都市は環境モデル都市としての政策を持っている。その政策との関わりをしっかりと打ち出していくことが必要だろう。環境モデル都市は、主に低炭素の考え方だが、単に省エネや低炭素だけでなく、例えば、今年は生物多様性の年だが、生き物の恵みを支える目に見えない環境として、水や空気に関する議論も必要であろう。目に見えないものは、なかなか議論の対象にならないが、放っておくと大変なことになる。その一つに、東山の緑もある。また、琵琶湖疏水もすごい資源だが、琵琶湖から来ているこの水が未来永劫に渡り大丈夫なのかという議論もある。橋爪委員からの提案である水路の活用を考え直すことは、実はこのきっかけにもなるのだろうと思う。

水辺というものは、生物の多様性の視点からも、景観の視点からも重要である。岡崎地域全体を考えた時に、単に施設のマネジメントだけでなく、水や緑という視点、エコロジカルなマネジメントの視点も含めて考えていただきたい。

水辺、山辺のように異なるものが交じり合う接点は、非常に活力を秘めた場所であり、安定的な場所ではない。平安神宮の庭園も、日頃からしっかりメンテナンスしていないと、実は藪へと変わってしまう。美しい環境には、必ずエコロジカルな原理があり、必ず人間の手が入っている。そうした美しい環境が集積しているのが岡崎地域である。

今回の委員会も、みんなで議論して、同意を得るところからのビジョンづくりということになると思うが、果たしてその内容で次代を切り開くにふさわしい内容になるだろうか疑問は少々ある。多少、先鋭的な取組も含め、いろいろな試みが提案されるべきだろうと思う。

ちょうど今、京都国立近代美術館で、京都市立芸術大学130周年記念の展覧会が行われている。お手元にチラシを配らせていただいたが、企画内容は、現在の問題、未来の可能性を、展覧会に来たオーディエンスも含めてみんなでつくっていこうというプロジェクトを現在進行形で見せるという、とても野心的な展覧会である。学生たちも疏水にはすごく興味を持っており、一つのテーマにしている。是非御覧いただけたらと思う。

今回の岡崎地域の活性化には大賛成だが、いろいろな規制、従来の枠組みにとらわれない新しい発想として、地球環境や借景、東山というものを是非入れていただきたい。

高木副委員長

村井委員の話題にも出ていた岡崎地域活性化懇談会は、私が京都市国際交流会館の館長に就任をした時に、もう少し岡崎地域を何とかしたいという思いで設立を呼び掛けたものである。とにかく当時は、国際交流会館の辺りは、日が暮れると、女の人一人で歩くのも危ないという状態であった。南禅寺に参拝者が多くない時期は昼間でも人通りが少ない状態であった。そうした状態を見て、これだけの施設、資源が集積しているのに何故だろうと不思議で、できることから取り組もうと呼び掛けたものである。活動を始めてから知ったが、なかなか各施設、主体の足並みが揃わない。それぞれの施設にはそれぞれの目的があって、目的以外のことをやろうとすると全て目的外使用となり実施が難しいということになってしまう。

例えば、国際交流会館は、国際交流と直接関係のないことをやると目的外となる。国際交流会館が休館日の月曜日には、駐車場も閉めないといけない。空いている駐車場を南禅寺や岡崎地域を訪れる人に開放することはできない。駐車場は車を駐車することが目的だと思うが、それ以上の「国際交流のため」という目的がないと国際交流会館の駐車場は使用できない。現実には、いろいろな困難があることが岡崎地域活性化懇談会を始めて分かってきた。

せめて市民や来訪者の方がちょっと休憩したり、談笑したりできる場所が欲しいとオープンカフェを始めたり、岡崎にある各施設を皆さんに知ってもらおうとオータムフェスタという催しをやったり、できる取組から始めて今日に至っている。現在は15の施設・団体に入らせていただいているが、周辺の民間施設等にも拡大する予定である。

岡崎地域の将来については、バリアフリーで少なくとも地域の中心には車が走っていない姿をイメージしている。二条通や神宮道通にはオープンカフェやベンチがあり、家族連れをはじめ、もちろん住民、市民の方が一日憩うことができるまちになっている。海外の事例を参考に出すのはあまり好きではないが、スペインのバルセロナのように、岡崎地域にあるベンチ、オープンカフェなどが全部アートになっていて、どこに座っていても楽しい、地域そのものがアートとして楽しくみんな憩えるまちになっている。

まちづくりのテーマとして様々なものが考えられるが、歴史的には「近代」、近代京都、日本を切り開いた時期を軸としたい。近代を軸として、現代から未来へ向かっていく、その象徴となる場でありたい。明治遷都で京都が衰退しかけた時、京都の復興のために市民が自負と誇りを持って成し遂げた事業の証、それが岡崎地域である。先ほど市民が憩えるまちと申したが、市民が岡崎地域を訪れた時、そうした京都市民としての心意気を感じ、これからも頑張っていこうという気持ちになれるような地域になってほしいと思っている。

MICE戦略についても御意見が出ている。私も観光振興計画の中で、是非岡崎地域にMICEをと提案したが、私が岡崎地域でイメージしているのは、小数のVIP限定のMICEである。限られた世界のVIPが、岡崎地域であればこそその満足を得られるようなMICE誘致を目指すべきだと思っている。

将来像と合わせて具体的方策という課題をいただいていた。岡崎地域が、京都にとってこんなに大事な場所だということを考えてもらえるように、是非1年のどこかの1日を「岡崎の日」と定めて欲しい。「岡崎の日」には、いろいろなイベント、行事が開催され、岡崎がどういうところか、どれほど素晴らしい歴史を持っているか、京都にとってどれほど大事なところかということをもっと知っていただきたい。

観光客を呼ぶことも重要かもしれないが、まず、市民が岡崎地域を楽しんでいる、市民が岡崎地域を大切にしていることが必要である。そうした地域だからこそ観光客も興味を持つ。市民にとって素晴らしい場所であること、それを大事にしたいと考えている。

門内委員長

御意見を伺っていて非常に強く思ったことがある。岡崎地域は伝統や文化が息づいているエリアであるが、同時に、21世紀型の都市が備えるべき条件、最先端のテーマに応えるべき条件を備えている。例えば、環境都市、景観都市、本日の委員会では話題に出なかったが歩いて回れるということで健康都市、さらには歴史文化都市、観光コンベンション都市など、今日的な政策課題が、このエリアの中ではどれもテーマとなりそうである。そうした意味で、岡崎地域は非常にチャレンジングなエリアである。

こうした時、最初にも申し上げたが、個々のコンテンツだけでなく、やはりエリア全体としてどのように発展させていくかを考えることが重要である。橋爪委員からの御指摘でもあったが、エリアマネジメントだけでなく、エリアデザインや、エリアプロデュースをどのように、また誰が担っていくのかということも含めて議論が必要である。いわゆるPPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ）の問題も含む大変先進的なテーマである。

今年の3月に国土交通省の成長戦略会議の住宅・都市分科会に有識者ヒアリングで呼ばれた時にも感じたことであるが、成長戦略は日本国内だけでなく、アジアや世界の広がりの中で考えることが必要不可欠になっている。例えば観光については、インバウンド観光として、アジア等海外からの観光客の取り込みが重要である。そのためには、観光案内標識、サイン整備から始めなくてはならない。先ほど高木副委員長からの御提案にもあったが、観光客を引き付ける本当に良いものを創り出していく上では、やはりそこに住んでいる方自身が楽しんでいることが大切である。

本日、いろいろな御意見をいただいたが、考えていた以上に、様々な観点から問題を探求できそうだと感じた。様々なテーマが、バラバラにならないよう、この検討委員会として、将来へつながる明確なエリアアイデンティティ、個性をビジョンとして打ち出さなくてはならない。また、単にレポートとしてビジョンを打ち出すだけでなく、市民や民間事業者を含め、どういう主体を形成し、誰が推進していくのか、そうした点まで議論しなくてはならない。

明治時代には、京都市民が心意気を持って頑張ってきた。現在では、市民の力、行政の力に加えて、民間企業の力というのも必要になる。そういう様々な力を組み合わせ、

良好なガバナンスを実現し、魅力的なエリアを創り出していきたい。

もしこうしたエリア成長戦略の方法論を構築することができれば、岡崎地域が良くなることはもちろん、京都全体にとっての成長戦略、エリアを活用した都市政策、都市経営を推進するための新しい方法論も出てくるのではないかなと考えている。新しい21世紀型都市のエリア戦略を考えていくという意味では、大変やりがいのある仕事ではないかなと思う。

最後に、3番目の議題である「今後の進め方」について事務局から説明をお願いする。

(3) 今後の委員会の進め方

——（説明 事務局 総合企画局市民協働政策推進室岡崎地域活性化担当部長 奥）——

門内委員長

岡崎地域のビジョン検討は、何年も時間を掛ける必要のある大きなテーマだが、策定のタイミングも重要であり、今年度でまとめていきたい。そのため、第2回検討委員会の後に作業部会を設置し、素案づくりを進めさせていただく。作業部会のメンバーは、事務局とも相談し、委員長から推薦させていただきたい。

次回の委員会は8月18日に国際交流会館で開催する。本日は、長時間に渡り、貴重な御意見をいただき御礼申し上げます。

6 閉会

以上